

探究・PBLコーディネーター研修2022：話題提供動画一覧

※2022.10.27現在で予定しているものです。話題提供者やテーマが予告なく変更する場合があります。

	テーマ	概要	課題解消ポイント	キーワード	
1	学習指導要領と探究：なぜ今、探究か	指導要領で「総合的な探究の時間」は必須化された。その背景事情はどのようなものなのか？ 社会からの要請やこの数十年での高等教育の役割の変化を踏まえて、高大接続改革は何をポイントにしたのか。その流れから「探究」のあり方を整理し、現状の教育現場での対応のポイントを議論する。	指導要領が変わったから（しょうがなく）対応する、という視点を脱却して、社会情勢全体への視野から整理し直す機会とする。社会全体での取り組みに、教員や学校が何ができるのか、という点を自分ごとにするのが鍵となる。	探究、観点別評価、資質・能力、コンピテンシー、社会人基礎力、リサーチプログラム、人事評価	西村圭一（東京学芸大学）
2	探究を巡る学校事情	探究学習・探究活動を支えるには、校内での教員間の連携や意識共有が必要とされる場合がある。また、生徒・保護者への教育目標の共有なども求められる。探究の指導を推進するために、どのようなハードルがあるのかなど、学校で探究を進める際のポイントを整理する。	実際に探究学習の指導担当になった場合や、指導サポートを依頼された場合に、必要なチームづくりや段取りを確認する。注意点をあらかじめ知ること、不安を解消したい。	保護者への説明、チームビルディング、教育目標、進学、就職、ブランディング、学校で取り組む良さや難しさ	酒井淳平（立命館宇治中高）
3	探究で身につく資質・能力	探究には決められたコンテンツはない。コンテンツベースではなく資質・能力（コンピテンシー）ベースの学びが求められる。教員はどのようなマインドセットが望まれるのかを整理する。観点別評価にもつながるテーマとして、育成したい資質・能力をまず項目として理解する。	本当に生徒は教員が教えずとも学ぶのだろうか？という不安もある。しかし、一旦、ハンドルを生徒に渡して信じてあげることが第一歩となる。理論的な背景だけではなく、実例やサポートの仕方をイメージすることで不安をなくす。各教科の学習や学校生活全般でも身につけた資質・能力は活かされるはずと理解する。	資質・能力、コンピテンシー、ジェネリックスキル、試行錯誤、主体性、対話的学び、パラダイムシフト、社会的構成主義	登本洋子（東京学芸大学）
4	人工知能研究からみる人間の思考	人工知能の研究は、人間の知的活動を研究することでもある。その視点から人間の知的な営み〜探究活動を考える。知的活動の能力に人間>AI、人間<AIのそれぞれを考えることで、探究に求められる活動が見えてくるはずだ。	AIはホットトピックの一つである。人工知能研究自体が大きな研究領域であり、その活用や社会実装およびAI理解（AIリテラシー）を考えることも探究のテーマになりうる。またそのような来るべき社会の中で自分がどのような人間に成長したいのか（キャリアプラン）を考えさせるためのヒントになるはずだ。	認知科学、人工知能、シンギュラリティ、自動運転、説明可能性	澤井進（AI時代の教育学会）
5	探究活動と知識技能	教科の知識・技能と探究の相互関連 答えが定まらない探究活動に向けて、教科で身につけた知識技能は、①事象を観察する視点であり、②より多くの代替案を産出する土壌であり、③代替案を判断する基準・観点となりうる。そして探究活動は教科の重要性を感じる場ともなる。			難波俊樹（東京女子学園中高）
6	企業のCSR、社会貢献と教育	リアルな社会課題に生徒を触れさせたい時に、企業などに実際のプロジェクトを紹介してもらったり、特別に生徒を参画させることも多々ある。その場合の企業側の目的や視点を教育現場も配慮することがプロジェクト学習を円滑に進めるポイントとなる。教育現場と題材提供する企業との橋渡しについて考える。企業の、 ・CSRとしての教育参加 ・直接ビジネスとしての教育参加 ・間接ビジネスとしての教育参加 の特徴を、お互いに理解する。	連携の経験値がないと意外と見えてこない、企業側の視点がある。企業側に不利益になるヒアリングや情報提供はできない。特に知財の扱いについては、教育現場と企業とは全く異なるということを配慮しておかないといけない。また教員側も意外と知らないことが多い。PBLでのプロジェクトを円滑に進めるためのポイントを知る。	産学連携、社会貢献、知財、著作権、会議、意思決定フロー、資金、ビジネス	岡田健志（増進堂・受験研究社）
7	探究とSDGs	「持続可能な開発目標（SDGs）」は世代や立場を超えたあらゆる人々に関わる目標であり、その達成のために「学び」は重要な役割を担っている。一方で、教育現場では抽象的なモラル論や単なるゴールの当てはめになることが懸念される。そこで、SDGsの課題に生徒が取り組む際に基盤となる考え方と留意点を整理し、学習者がSDGsを「自分ごと」として捉え、批判的かつ行動的に学ぶための探究のあり方を考える。	SDGsを「良いこと」として無批判に受け入れた、あるいは関心のある目標（ゴール）の当てはめ、という状況を打破したい。「持続可能な開発（sustainable development）」の概念を適切に理解し、速い世界の出来ごとではなくひとりひとりが自分ごととして課題を捉えるための視点を育てることを目指す。	持続可能な開発目標（SDGs）、サステナビリティ、社会課題、自分ごと、課題の発見、アクション、ウェルビーイング、キャリアプラン	石井雅章（神田外語大学）
8	探究とSTEAM・ICT	ICT活用は昨今大きなテーマになっている。実際に、記録・調査・分析・発表という場面では活用が望まれる。一方で、ICT活用が目的化することは望まれない。またICT活用を教員が「指導する」ことも望まれない。生徒が自らの活動を推進する際のICT活用のヒントをここではいくつか紹介する。そのための環境整備のポイントを整理する。未来の教室「STEAMライブラリー」を活用した実践を活用して考える。	ICTを使う／使わないという判断も含めて生徒が主体的に使い方をイメージして取捨選択することが大事であるという認識に立つべき。どうしても「指導が必要」というマインドを持つと負担が大きくなる。むしろ、生徒が「こんな使い方ができた」という発見を教員が楽しめる姿勢を推奨する。あわせてSTEAMライブラリーの教材を参考に教科横断の実践を考える。	STEAM、ICT、ハイブリッド、オンデマンド、STEAMライブラリー	米田謙三（関西学院千里国際中高）
9	探究と大学入試	大学での学びや入試への対応という「高大接続」の観点へ、入試には不要であるという論もあるが、入試制度の変化や探究によって進学実績を伸ばしている高校もある。総合型選抜への道筋から探究を考える。	総合型選抜が多くなっており、大学入試も個性化が進む。また本来は学力型の入試でも、自分ごととして学ぶ意欲を育てることは重要である。実際に大学側は研究や自ら学ぶ学生を求めている場合が多い。その論点を整理してみることで、より柔軟な指導ができるようになるはずだ。	大学入試、アドミッション・ポリシー、進路選択、総合型選抜、ポートフォリオ	未定
10	探究授業の空間作り	「場作り」をテーマにする。教室内での、議論や協働が活発になる心理的安全性のある空間作りとはどのようなものかを考える。そのためには、職員室内にも心理的安全性が担保される必要があるかもしれない。	ICTを使う／使わないという判断も含めて生徒が主体的に使い方をイメージして取捨選択することが大事であるという認識に立つべき。どうしても「指導が必要」というマインドを持つと負担が大きくなる。むしろ、生徒が「こんな使い方ができた」という発見を教員が楽しめる姿勢を推奨する。	心理的安全性、協働、社会構成主義	未定
11	脱・正解主義に向けて	生徒の探究を支える教員の役割としてファシリテーションが重要である。教えるのではなく、議論や活動が活発化し、結果としてより主体的で対話的で深い学びが促進されるように、活動や場を整えることがどのようなものかを知る。（教育現場視点）	どうしても「教える」に重きを置きたがる教員が、生徒の探究活動にうまく伴走できるように、視点を変えることを促す。生徒とともに、教員自身も探究を進めていくことを楽しむことにフォーカスする機会にしたい。	ファシリテート、心理的安全性、アイスブレイク、リフレクション、コーチング、Being	藤村祐子（東京学芸大学）
12	探究授業のファシリテーション	教育現場だけでなく、ビジネスシーンでもファシリテーションは重要なスキルである。教育・ビジネスに共通の点も多々ありつつ、異なる点もある。企業との連携型のPBLを取り入れる際など、その違いを意識しておくことは有益だと考える。（企業・ビジネス視点）	会議体やプロジェクトチームの目的によって、マインドセットは異なる。どうしてもビジネスシーンだと「有期性」（締切）と「コスト」の部分が強調される。そのような制約の中でどうしたら共感と納得性が高められるのかという点が理解できるようにするにしたい。	ファシリテート、心理的安全性、アイスブレイク、リフレクション、共感、デプスインタビュ、プロトタイプ	岡田健志（増進堂・受験研究社）
13	社会に開かれた学校論	社会課題を考える際には、地域や企業へのヒアリングやデータ・資料提供などが必要になる。その際には、教員が橋渡ししながらも、生徒がマネーにも配慮しつつ、自ら議論に入る姿勢・スキルと共に、実際の行動（シビック・アクション）が求められる。実例をもとに、校外関係者との連携ポイントを学ぶ。	生徒が探究課題を自分ごとにする際に、リアルなフィールドが必要になる場合がある。学校と地域・企業等との連携をコーディネートするとき、どのように双方がWin-Winの関係を作るのか、実際の事例を通して、教員が探究学習をサポートする際の実務について明確にする。	地域、地域課題、企業、連携、マネー、行動、トラブルシューティング、窓口業務、Win-Win	荒木貴之（ネットラーニングホールディングス）
14	探究と評価	最も教員を悩ませる課題の一つが「評価」である。客観テストと異なり、生徒の活動や成果物についての評価はどのようにするべきかを整理する。ルーブリック・形成的評価の基本ポイントを理解する。また、なぜ評価をするのかについても考える。	探究の評価は、何らかの数値で輪切りにはできない。個人の評価、グループ活動の評価にも違いがある。またルーブリックに慣れていないと評価が恣意的になるという不安もあるが、何のために評価をするのかを考え、評価や評価を作り上げるプロセスの重要性を感じる回としたい。	ルーブリック、合意形成、形成的評価、プロセス、自己評価評価の意義	酒井淳平（立命館宇治中高）
15	探究を支える校内組織	探究を担当する場合の懸念点の一つには、探究活動が広がる際に自分の担当教科外のトピックが出た場合に指導できない、という不安がある。担当はファシリテートに徹すると言え、やはり生徒の疑問への返答や伴走を一人でやり切るのは難しい。チームでの伴走体制を校内で構築する必要がある。その際の注意点や必要な根拠について理解する。事例のパターンを手短かにいくつか紹介したい。（例：コースはほぼ全体で担当/少人数のチームが担当/担任中心/教科中心など）	クラスの各教科担当との連携、学年主任や学校経営陣との連携（特に外部との連携の際には）が求められる。その点に心理的なハードルを感じる教員は多いと想定される。また、探究を見守る楽しさを「同僚一人と共有する」活動ができるようになること、具体的に実現可能なところから始めるマインドを養成する。またこの回を通じて、校外の「同志」がいることを実感することで、不安を軽減する。	チームティーチング、チームビルディング、巻き込み、教育のゲーミフィケーション、報告・連絡・相談	難波俊樹（東京女子学園中高）